

養老川流域の歴史散歩

—台地海上の地がかたること—

平成25年7月16日
総の国をかたる会
白鳥 元治

1. 台地の概要



明神様(元宮)の石碑

姉崎の台地は、養老川に沿って東方へと延びている。そして開折された小さな谷をつくり、養老川に向けて突出した舌状台地をいくつもつくっている。台地の先端の地に、畑木・海保から今富・宮原・引田・神代・分目・安須、そして中高根と集落が続く。神代台地は、海上小学校や農協の海上支所が位置する台地である。学校と県道を挟んで、反対側に神代神社がある。古社で、「三代実録」に載る神社である。どうも、現在の場所ではなかったようだ。「元宮」というべき石碑が、神代の三叉路の信号すぐ先に存在する。隣接地は宮原という集落だが、「宮原」という地名は、ここに神社があったことからきているのだろう。地元の人々は、「明神様」と称しているが、よく見ると「神代

神社」と刻まれていた。(上図)この神代台地と分目集落の台地との間は、細く狭い谷をつくって田圃になっている。谷の奥に、「本郷」という小字名がある。人が米作りをして、「ムラ」をつくるようになったのは、こういった小さな谷間から始まったであろう。湧き水や雨水は、この谷に集められ小さな川となって、台地前に広がる水田の中を流れていたにちがいない。忘れられているが、引田川という呼称もあったのだ。その昔の古養老川の支流であり、通称千石耕地といわれる現在の水田地帯は、沼沢地であった。現在その痕跡が用水路と姿を変え、柳原の揚水機場に至って養老川に繋がっている。かつてこの支流は、中世の山城である分目要害城の寝小屋を取巻くようにしていたようで、水堀の役割を果たしていたと考えられる。対岸は、村上氏の城館があった地である。足利氏が上総守護になった鎌倉期の中頃、被官であった村上氏が、この地に入部してきたものと考えられている。分目要害城側の台地から、古養老川の支流と渡河によって、村上城館と行き来ができ、かつての郡衙推定地の小折(郡)にもつながる。台地は立野台地となって、鎌倉街道と推定される古道が存在する。引田から立野・光風台へと上る道は、現在立野道路と称しているが45年頃前までは、坂道の先は山道しかなかった。上りきると光風台の信号で、豊成からと光風台団地、袖ヶ浦方面へ向かう十字路がある。ここの信号先のすぐ左に、立野無線中継所の鉄塔がある。鉄塔あたりから、姉崎カントリークラブの縁を通り、八幡カントリーとの間を貫け、袖ヶ浦市と市原市の境(深城・天羽田)となっている畑の中を通り抜けている道が、鎌倉街道と推定されている。立野に字名「鎌倉街道」があり、袖ヶ浦市の川原井に「鎌倉通」がある。袖ヶ浦台地上の鎌倉街道は、袖ヶ浦公園辺りまで続き、台地の先端の飯富神社付近に出る。そして平地に出た蔵波には、「鎌倉街道」の字名が残っている。また戦前郷土史家の小熊吉蔵が、見つけたという木更津中鳥田の道標には、「北 かまくら道」と刻まれている。平地に出ると、長年の間の自然災害にであったり、近世以降の開発により古道は捉えられなくなっていく。たぶん飯富神社付近から二方向に分れ、鎌倉街道と称する古道はあったのだろう。

一方、分目・神代台地へ向かう立野台地からの鎌倉街道は、よく分からないところがある。立野の無線中継所の鉄塔から、幹線・支線といった枝道のいずれかは、分目・神代台周辺につながっていったと推定できる。光風台小学校裏道で、ゴルフ場と接する角に祠がある。その存在の意味するのは何か、まだ確かめていないが、先の道は旧高坂集落になる。この辺りから古道は、ゴルフ場内(荻野原台地)を通り下っていったと考えられている。分かれて、今富～海保へ向かった古道も推定できる。「今富大道」とい字名がのこる。鎌倉道が、何がしかの歴史の痕跡をのこし、国・郡衙境に接しもろもろの政治、文化、技術芸能、信仰などをどのようにして伝えたか、併せて考えてみる姿勢が大切であろう。

2. 神代神社と古代海上の地

江戸時代後期の「房総志料」(中村国香・旧夷隅郡長者町の名主で宝暦11年(1761)から上総と安房二国を廻りまとめたもの)には、神代を「カジロ」とよんでいるが、もともと祝詞で、「カミヤライ」と読むことが出来るといっている。市原郡誌に記しているように、三代実録に貞観十年(868)従五位下を授けられたと載っている。神代という地について「上総町村誌云 里傳に云う、村は古来の神地にして、神代の神の座すより、初めて二十三戸存したる餘滴なりと、後大郷となる。中古新生権現堂等の諸村を分かつ〜」とある。さらに「〜神代村にありて、天照大日靈貴神(オオヒルメムチ)(天照大神の別名)を祭る、土俗傳ふる所に由れば、景行天皇四十年日本武尊東征の視察する所に係わると、唯憑據故ふ可からず、故神祇官史生立野良道職する所の社記を掲げてその縁由を示す」とある。江戸時代末期、地元出身の国学者立野良道が、神代神社の由来を調べ上げたのである。祭神といい日本武尊東征の話、三大実録(延喜元年・清和・陽成・光孝天皇の時代の史書)に、従五位下を授けられたとあることから、姉崎神社から分かれたものにはない。姉崎神社社殿に、「景行天皇四十年日本武尊東征の時に初めて祀る所」とあるのは、神代神社と同じである。郡衙の地方役人となった上海上国造の後裔のが、祭主を務めたのであろうか。千石耕地を挟んで、古養老川が築いた自然堤防上にある小折(郡)の地は、古代の上海上国の郡衙であり、古代地方行政の役所が在った所と推定されている。神代神社は、古養老川流域の農耕儀礼として、不可分の太陽祭祀となったと考えられる。古代のこの台地は、上総國海上郡「日の祭り」の中心地であったかもしれないのだ。

「日奉」(ヒマツリ)とは、天皇の行う農耕儀礼であり、太陽神の祭祀にかかわる儀礼をとりおこない、朝廷から授けられた祭官である。時代的にもここでいう「日の祭り」の社は、郡衙のあった小折と向き合っている台地の神代神社しかないのだ。神代神社は、古社の神社としては格式が高く、高滝神社と同格なのだが、今は忘れられた小さな社である。

台地上の集落を取巻くように、下に細道が廻っている。この一角から、神代神社へと上がる入り口がある。小字名、殿屋敷といわれる高台である。以前から、神代城跡といわれてきた主要部であるが、実際にここから上ってみると、斜面は切通しのようにもみえるし、また入り口は虎口だろうと指摘する人もいて、そう見ればみえるが後年になって台地との上り下りの必要性から、人工的にきったともいえそうで、とても断定できそうもない形状である。谷の反対側の分目要害城址のように、「要害・寝小屋・東門・門前・・・・」とか、「堀の内」といったような小字名もなく、「殿屋敷」といった小字名があるだけである。この地の農民集団を統率し、立っていた在地領主の居館があったと推測した方が自然のような気がする。中世に入ると律令制度の土地制度が崩れ、それぞれ自立してくる在地領主が、あちこちに出現してくる。「日本城郭体系」に載る引田城とか万台城は、隣接してすぐ近くにあるが、城郭というより城館といったほうがよさそうである。これら在地領主といわれる彼等は、上海上国造系の後裔たちなのだろうか。

さらに後年戦乱の世に迎え、本格的な縄張がある中世の山城分目要害城が、突然として出現する。記録も伝承もない山城である。空白が多い中世の地方であるが、いつかの機会に再度このことを考察したい。